

雑 報

変光星が名付けられた新星など

変光星の命名と登録は、ソ連科学アカデミーの変光星委員会が担当している。近着の IAU の変光星委員会から出版される Information Bulletin on Variable Stars (IBVS) No. 1581 によると 1978 年までに命名・登録さ

れた変光星の総数は 27476 星で、本誌 1976 年 8 月号に紹介以来約 1500 星が加えられたことになる。これによると最近では 赤外線源カタログ (IRC) 中で変光の認められるものも含まれるようになり、X線源などと共に変光星の範囲が拡大して来たことがわかる。下記は 1976 年以降に命名・登録された新星などのリストであるが、IRC の星は含んでいない (本誌 1978 年 8 月号参照)。
(香西洋樹)

星	名	α (1950.0) δ	発見者	発見日 (U.T.)
1. Aql X-1=3U1908+00	=V1333 Aql	19 ^h 8 ^m 7 ^s + 0°09'		
2. Nova Aur 1964	=QZ Aur	5 25.4 +33 17		
3. Nova Car 1948	=V365 Car	11 01.2 -57 39		
4. Nova Cen 1973	=V812 Cen	13 10.8 -58 11		
5. Cyg X-3	=V1549 Cyg	20 30.6 +40 47		
6. Nova Cyg 1978	=V1668 Cyg	21 40.6 +43 48	P. L. Collins	1978 Sept. 10.24
7. Nova Oph 1976	=V2104 Oph	18 0.9 +11 48	Y. Kuwano	1976 Sept. 23.55
8. Nova Oph 1977=H1705-25=V2107 Oph	=V2107 Oph	17 5.2 -25 02		
9. Nova Oph 1969	=V2109 Oph	17 21.2 -24 34		
10. Nova Sge 1977	=HS Sge	19 37.1 +18 01	Hosty	1977 Jan. 7.73
11. Sgr X-1=3U1744-26	=V3893 Sgr	17 44.7 -26 34		
12. Nova Sgr 1975 No. 2	=V3964 Sgr	17 46.2 -17 22	I. Lundström B. Stenholm	1975 June 8
13. Nova Sgr 1977	=V4021 Sgr	18 35.2 -23 23	Y. Kuwano	1977 Mar. 27.8
14. Nova Sgr 1968	=V4027 Sgr	17 59.3 -28 45		
15. Nova Sco 1949?	=V902 Sco	17 22.7 -39 02	Henize, Haro	1949 May 20.9
16. Nova Sco 1968	=V916 Sco	17 40.5 -36 02		
17. He 3-1481	=V917 Sco	17 44.8 -36 8		
18. Nova Sct 1976? =Stephenson 557	=V385 Sct	18 24.1 -14 42	Y. Kuwano	1976 June 28.68
19. Nova Sct 1958?	=V427 Sct	18 43.0 - 4 30		
20. Nova Ser 1978	=LW Ser	17 49.0 -14 43	M. Honda	1978 Feb. 28.84
21. Vela Pulsar=PSR0833-45	=HU Vel	8 33.7 -45 00		
22. Nova Vul 1976	=NQ Vul	19 27.1 +20 21	Alcock	1976 Oct. 21.76

書 評

「太陽系発見の証明」——おはなし天文学 4

齊田 博 著

(地人書館, 290 頁, 1,200 円)

これは雑誌「天文と気象」に7年も連載されて来た「おはなし天文学」をまとめたもので、すでに3巻が発行されており、本書は第4巻にあたる。一口に言えば天文学史上のエピソードをまとめたものだが、巻によって多少のねらいの相違があり、本巻は天文学者が太陽系の探究にどんな態度で取り組んできたかということを中心に構成されていると言う。

それにしても、よくもまあこれだけの数多くのエピソード

を発掘されたものだ、とまず感心させられる。今までの天文学史と言うと、だいたい宇宙観の変遷の歴史を中心としていて、それはそれで当然のことであり、必要なことなのだが、その主流からちょっと外れたようなところに、実に豊富なエピソードが隠されているものだと思う。だいたい天文学者には奇人が多いと言うこともあるのだろうが、著者の努力にも負う所が多いのだろう。

本書におさめられた 22 篇のエピソードは、いずれも興味深いものばかりであるが、評者が特に興味を引いたものを数篇紹介して見よう。「彗星珍説ライソアップ」はモーペルチュイのような有名な学者でさえ、「宝石は彗星が運んで来ると述べていたりしたとある。本書ではこの他にも有名な天文学者が、とんでもない珍説奇説を述べていた話が、いたる所に出てくる。

ハーシェルの「月人デッチあげ事件始末記」は、ハーシェル自身に罪のあることではないが、当時の通信や交通事情、それに悪質ジャーナリストの登場と言う当時の世相がうかがわれる。また「太陽黒点の発見」の項では、太陽黒点の最初の発見者が誰であったのかと言うことは、簡単な問題ではないこともわかる。また「一度は確認された金星の衛星」を読むと、一時は金星の衛星がかなり公認されていた時期もあったことがわかる。

本書の中で何と言っても圧巻なのは、土星の輪が輪として確認されて行った過程の歴史だろう。本書ではこれを「ホイヘンス土星の輪十四番勝負」として、論争の過程を克明に追って行く。最後は「傷だらけの勝利」として結んでいるまで、実にリアリティーがあって面白い。

また「ハーシェルは天王星の輪を見たか」「学界をわがした海王星の輪」などは、今日天王星や木星の輪が確認されて、ひょっとすると外側の惑星には全部輪があるのではないかと皆考えはじめている所なので、なおさら面白い。

実際天文学史における興味あるエピソードは、いつになったら汲みつくされるのだろうと思う。斉田氏はまだ発掘を続けられるそうであるから、今後ますますの御努力に期待したい。

(関口直甫)

カルチャーブックス 32

「太陽・月・星と日本人」

広瀬秀雄著

(雄山閣, 昭和54年3月20日発行, 227頁, 880円)

著者の広瀬秀雄氏は、すでに、「日本人の天文観」、あるいは、「年・月・日の天文学」などといった、暦や時、天文にまつわる文化史的、民俗学的な、エッセイ風の好著作をいくつか出版しておられる。本書もその流れを受けついで書かれた、どちらかといえば気軽に読んでいける書物である。

内容は、大きく「庚申信仰と星」、「古典と天文学」、「沖繩の星」、「呪符と護符」、「陰陽師たち」、「時の話」、「暦と庶民」の7章に分けられ、それぞれに10ページから50ページ程度がさかされている。各章は更におおの3ページ内外の小見出しに分けられて、その主題に関しての古記録、文献の調査やそれについての解釈、著者の体験や軽い話題などが織りまぜて綴られている。それは一見、著者の気の向くまま、筆の進むままに書き進められているという印象を受けるが、注意深く読み直してみると、それぞれの章の構成はなかなか巧みである。ある見出しのところで、急に突飛な話題が出てくると思うと、読み進むうちに、いつの間にかそれまでの話と融和し、全体としてまとまった話となっていく。そして、なるほどこういうことかと思わせられるのである。

著者の博学多識ぶりはこの書の中でもいかに示されていて、読者を感心させるが、その多くは、詳細な調査や史実の掘り起しにもとづいていて、読み手を納得させる。また、各所に見られる独特の軽妙な言いまわし、あるいは、現在の世のあり方をチクリと批判する表現などに興味を持たれる人も多いことだろう。

場合によって、説明にやや専門的な内容を含んでいることもあるので、一般の人にとって多少読みにくいのではないかという気もした。そこで、2、3の知人に読後の感想をたずねたところ、特別の予備知識がなくても、面白く読んでいけるとのことであった。ただ、特に興味を感じたという章は、人によってまちまちであった。

「政府は元号法制化を避ける方針をかためたらしい」といった文章は、今となっては空しいものであるが、これは著者の責任ではあるまい。ちょっとしたことでフに落ちないのは、真田幸村の十文銭の旗印について述べてあるくだけである。立川文庫ではないが、評者の愛読した講談本では、幸村はいつも六文銭の旗印をひるがえしていた。落語の「真田小僧」でも確か六文をだましとる話になっている。十から六への変化は、どうしておこったのであろうか。

(長沢 工)

「大宇宙への設計」

日下実男著

(東海大学出版会, 1978年7月7日発行)
119頁, 2,000円

人類が宇宙に目を向け始めたのは太古の昔からではあったが、地球の文明に宇宙開発の第一歩を印したのは、今からほんの約20年前、ソ連の人工衛星スプートニクとそれに続くアメリカのエクスポローラーからと言ってよい。1969年7月のアポロ11号による人類初の月面着陸によって、米ソの華麗な宇宙開発競争は一旦幕を閉じたが、その間、宇宙の利用は私達にとってより身近なものとなった。さらに、現代天体物理学、地球物理学及び物理学工学全般に渡って、人工衛星の利用が無人から有人へと推移してゆく過程で、飛躍的進歩をとげた。地球に生物が生れ、水圏から陸地へ、そして人類を宇宙生物として位置づけ、将来惑星表面から脱出し大宇宙の中に安住の地を求めようと言う認識に立脚した著者の目から見た今迄の宇宙開発・宇宙科学とその将来について語っているのが本書である。

第1章“開けゆく宇宙空間”は、色々な人工衛星の紹介と共に、現在進行しているスペースシャトル計画や、未来の宇宙発電所、スペースコロニー造言及している。第2章“人類月面に立つ”は、主にアポロ計画(17号迄)の総括で、第3章“太陽系の謎にいどむ”は、惑星探査の結果とその将来計画、そして第4章“大宇宙への挑

戦”は、宇宙の地球外文明との交信についてである。全般に多くの美しい写真と、豊富な資料に基づく簡潔な解説は、宇宙開発とそれに伴った天体物理学を一望出来て、一般人（小学・中学生はもちろん）だけでなく、専門家にとっても楽しい本である。著者の思想は、プロローグとエピローグによくまとめられている。

“1977年4月20日打上げられた科学衛星 GEOS が赤道上空 36000 キロの静止軌道に乗った (p. 12)” という記事は誤りで、それは予定であって、実際は遠地点 38000 キロ、近地点 2050 キロの楕円軌道に入ってしまった (ref: Space Science Rev. 22, No. 4, 1978), 本書の主

旨には影響ない事であるかもしれないが、ここに記しておく。(江尻全機)

著者の日下実男氏は、1979年9月11日、癌のため死去された。53才。同氏は48年、東大物理学科卒、通信省を経て朝日新聞に入社。科学記者として活躍された。特に天文、海洋の分野では、流麗な筆致の啓蒙書、翻訳書も多い。69年に退社した後は、科学評論家、SF作家として健筆を振るう傍ら、日本宇宙飛行協会の会長をつとめられた。著者の御冥福をお祈りする次第である。

(編集部 大木健一郎)

賛 助 会 員 名 簿

(1979年9月5日現在の国会賛助会員は下記のとおりであります。ここに) (社名、代表者名を掲載させて頂いて感謝の意を表します。(五十音順))

旭光学工業株式会社	松本徹	サンシャインプラネタリウム	堀家邦男
朝日新聞社科学部	木村繁	地人書館	中田威夫
アストロ光学工業株式会社	滝沢磐	天文博物館	
岩波書店	緑川享	五島プラネタリウム	五島昇
宇宙開発事業団	松浦陽恵	東京電力株式会社	平岩外四
大阪市立電気科学館	辰己博	東北電力株式会社	若林彊
近江屋写真用品株式会社	野呂幸義	長瀬産業株式会社	
沖電気工業株式会社	佐藤敦之	コダック製品事業部	福島寿治
カールツアイス株式会社	波木泰雄	ナルミ商会	村上俊男
関出書房新社	清水勝	日本光学工業株式会社	小秋元隆輝
関西電力株式会社	芦原義重	法月鉄工所	法月惣次郎
関東電気工業株式会社	関井忠夫	富士通株式会社	
啓文堂松本印刷	松本喬	システム統轄部	三次衛
恒星社厚生閣	佐竹久男	丸善株式会社	飯泉新吾
五藤光学研究所	五藤齊三	三鷹光器株式会社	沖村義一
金光教本部教庁	金光鑑太郎	三菱電機株式会社	
誠文堂新光社	小川茂男	宇宙開発部	中村憲二
谷村株式会社新興製作所	谷村恒治	ミノルタカメラ株式会社	田嶋一雄

1979年8月の太陽黒点 (g, f) (東京天文台)

1	13,	91	6	10,	34	11	6,	55	16	10,	94	21	—,	—	26	—,	—
2	10,	57	7	9,	50	12	8,	59	17	8,	79	22	15,	171	27	9,	121
3	10,	34	8	11,	60	13	11,	72	18	9,	82	23	15,	180	28	—,	—
4	10,	32	9	11,	61	14	9,	95	19	8,	60	24	16,	194	29	14,	129
5	9,	54	10	9,	58	15	10,	100	20	—,	—	25	—,	—	30	—,	—
(相対数月平均値: 136.7)															31	12,	105

昭和54年10月20日	発行人	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
印刷発行	印刷所	〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町251	啓文堂松本印刷
定価 300 円	発行所	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
		電話 三鷹 31局 (0422-31) 1359	振替口座 東京 6-13592